

2026年5月17日（日）昇天祭主日礼拝説教

「父なる神の右の座に」井上隆晶牧師

使徒言行録1章3～11節、マルコによる福音書16章14～20節

①【神の右の座に着かれた】

今日は「昇天祭」です。イエス様は復活してから40日間弟子たちに姿を現し、御自分が生きていることを証明された後、天に昇られました。それを昇天といいます。葬式でも「召天」と言いますが、字が違います。「召天」は死ぬことですが、「昇天」はキリストが元々おられた天に戻られたことを言います。使徒言行録に「イエスは弟子たちが見ているうちに、天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。」（使徒1:10）とあります。雲は昔から神の乗り物と言われていましたから、イコンでは雲の代わりに天使に担がれる者として描かれています。

マルコ福音書では「主イエスは、弟子たちに話した後、天に上げられ、神の右の座に着かれた。」（マルコ16:19）と書かれていますし、ペトロは聖霊降臨祭の日群衆に向かって「イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。」（使徒2:33）説教しました。このようにイエス様が神の右の座につかれたという告白は早くから教会の中でされていました。しかし誰も見たわけではないのですから、これは教会の信仰告白であって、やがて使徒信条にも「天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり」と入れられるようになりました。イエス様が神の右の座に座ったというのは、イエス様は父なる神様と同質なる神であり、神の右に座することは、裁きの全権を委ねられた王であることを意味しています。

●7世紀のダマスコのヨハネはこう書いています。「我々は、キリストは父の右に座していると考えているが、父の右を場所（空間）であるとは思っていない。空間として制限された右を、無制限である方がどうして持っているだろうか。右とか左とかは制限されたものに属する。我々は父の右とは神の栄光と尊敬を意味していると理解する。そこでは世の先より神として存在し、父と同じ本質を持ち、世の終わりに肉体となられた神の子が、体をもって座し、その肉体は栄光に与っている。キリストは、その肉体と共に、すべての被造物から崇拝を受けている。」

たくさん昇天の聖画を見ていると、「キリストは神だ」ということを描こうとしているのが分かります。

②【受肉、十字架、復活、昇天によって人間全体が救われた】

昇天は、キリストの救いの最後の業であることを教えています。キリストは下って来た時には神性だけでしたが、昇られる時には人間性と一緒でした。下って来

た時には一人でも、昇られる時には二人（一体）なのです。よく「十字架によって救われた」という人がいますが、それは救いの一部に過ぎません。キリストの受肉（クリスマス）、十字架、復活、昇天というすべての過程によって人間全体が救われるのです。キリストの受肉は救いの始まりであり、十字架によって罪を取り除き、復活によって死を取り除き、昇天によって人間性を天に引き上げ、完全に人間の救いが完成したのです。神は人間の誕生から死までを同じように体験し、それらを引き受けて、ご自身の中で癒したのです。この一体の神秘によって人の救いは完成します。これが伝統的な教会の教えです。

キリストによって初めて人間の身体が天に昇ったのです。今まで誰も天に上ることはできませんでした。人間は死ねば、みな魂は天に上げられると思っている人が多いのですが、人間は自分の力では天に上れません。しかし降ってこられた方、すなわちキリストと一体になるなら、彼によって天に昇ることができるのです。パウロはこう書いています。「罪のために死んでいた私たちをキリストと共に生かし、…キリスト・イエスによって共に復活させ、共に天の王座に着かせてくださいました。」（エフェソ2:5~6）ここには「共に」という言葉が三回出て来ます。人間もキリストと共に復活し、共に天の王座に着いたと書かれています。やがて復活し、やがて天の王座に着くのではなく、もうすでにそれが成ったと言っているのです。それはキリストと私たちが一体であるからです。人間が神の右に座するという事は、神化（テオシス）と呼ばれる、神性が人間にも分け与えられるという意味なのです。人間と神はキリストによって一つにされ、交わりが完全に回復され、距離がものすごく近くになったということなのです。

●先日、教会建築の本を読んでいて面白いことを知りました。カトリック教会は塔を高く作り、天井を高くします。それをゴシック建築と言います。一方ビザンチン教会の特徴は天上をドウム型にし、建物を丸く覆うように造るのです。それは二つの神学の違いをよく表しています。正教会では天が地に降ってきて、天と地がキリストにあって一つにされたので、天が近くに感じるように造られているということなのです。

以前、コロナで人間の距離が遠くなってしまった時に、ある神学校の先生が「人間は距離が近いときに幸せを感じ、距離が遠いときには幸せを感じないのです。」という話をされたことを思い出しました。共に同じ作業をし、共に食事をし、共に会話をすると人は安心します。神は天から下り、地に近づき、地と一体になられたのです。神が近づいて下さったことに感謝しましょう。

③【キリストは教会という体で今もあなたと共におられる】

天使は、弟子たちにいいました。「ガリラヤの人たち、なぜ、天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」（11節）「なぜ」とは奇妙な問いかけです。イエス様が去って行かれたので寂しく見上げているのです。しか

し「なぜ天を見ているのか」という言葉をもって、天使たちは「天ではなく地上を見なさい」と言っているのです。天使は、こう言いたかったのです。「イエス様が去ってしまったと悲しんではならない。イエス様は目には見えないけれどもあなたがたと共におられます。」それはイエス様自身が弟子たちに言われた事でもあります。「私は世の終わりまでいつもあなたがたと共にいる」(マタイ 28 : 20)

●4世紀のヒッポのアウグスティヌスはこう言っています。

「主は私たちの所に降って来られた時、天を去ったわけではなく、再び天に昇られた時も、私たちから身を引かれたのではありません。」

共におられるのですが、その有り様が変わったのです。今までは「肉体の姿」で共におられたのですが、これからは「教会という姿」で共にいて下さるのです。教会といっても建物ではありません。教会とは礼拝であり、神の言葉と聖餐、キリストにある聖なる生活であり、聖霊と愛の交わりであり、キリストの身体である信徒さんたちです。私は今までどれほど教会と教会に連なる人々、牧師や信徒たちに助けられたことでしょうか。キリストがそれらの方々の身体を借りて、私を愛し、助け、共にいてくださったのだと思います。誰がそれらの人たちを集めることができるでしょうか。神以外には考えられません。すべての信徒さんをキリストと重ね合わせて見ると良く分かるのです。

●一人の女子大生がある神父さんのことを「すごく温かいの。何と言うのかな、謙遜で、誰でもそのまま受け入れてくださる」と話をしていたそうです。渡辺和子シスターはその後、このように語ります。「司祭、修道者は、まなざしに、笑顔に、言葉に、態度に「あなたは生きていていいのですよ。生きていてくださいね」と呼びかけるプロとして存在したらいいと思います。この世にあって、この世のものでない人たち、世が与える平和と異なった主の平和の存在を証明する人としての司祭、修道者の生活が今日も求められています。」

先日、カトリック玉造大聖堂で教区総会が行われ、初めに主任司祭であるヌノ・リマ神父さんが挨拶をされました。私は彼と知合いですから、部屋まで挨拶のお願いに行きますと、ニコニコしたヌノ神父が出て来られました。カラーシャツの上に着ているスーツを見たら、失礼ながらそんなに上等ではない着古したスーツに見えました。司教座聖堂の主任司祭なのですから、良い服をおめしになっても良いのに、とても質素で驚きました。いつもニコニコして、何と謙虚な方なのだろうと尊敬しました。

私もこの世にありながら、人々に天国の香りを感じさせる者でありたいと願います。キリストは地である私を、天にするために来られたのです。それはまだ完成はしていませんが、既に私の中で始められたのです。キリストの香りとは、天の香です。私がそこにいることでキリストの香りが、天の香りが感じるようになりたいと願います。そのためにも修道生活をしていきたいと思えます。